

# 『源氏流極秘奥儀抄』注釈（二） 12須磨へ17絵合

岩 坪 健

本稿は『源氏流極秘奥儀抄』の須磨（『源氏物語』第二二帖）から絵合（第二七帖）までを掲載する。各帖の担当者（出口京香、胡鴻洋、武蔵隼斗）は、すべて本学博士課程在学者である。凡例などは前稿と同じであるので省略する。

## 十二 須磨<sup>スマ</sup>

花<sup>ハナ</sup>の宴<sup>エン</sup>の頃<sup>コロ</sup>、扇<sup>アウキ</sup>をとりかはし給<sup>タマフ</sup>ひしは、朧<sup>オホロツキ</sup>月<sup>ツキ</sup>夜<sup>ヨ</sup>の内侍<sup>ナイス</sup>のかみ也<sup>ナリ</sup>。御門<sup>ミカド</sup>さしも時めかせ給<sup>タマフ</sup>ふを、源氏<sup>ケンシ</sup>をかし給<sup>タマフ</sup>ふと聞<sup>ミ</sup>えて、御母<sup>オホボイ</sup>大<sup>ハ</sup>に腹<sup>ハラ</sup>たち給<sup>タマフ</sup>ひて、あしきさまにいひ、須磨<sup>スマ</sup>へながし給<sup>タマフ</sup>ふによりて、卷<sup>マキ</sup>の名<sup>ナ</sup>となれり。さて榊<sup>サカキ</sup>の卷<sup>マキ</sup>に、いせへくたり給<sup>タマフ</sup>ひし宮<sup>ミヤ</sup>す所<sup>トコロ</sup>より、かくて源氏<sup>ケンシ</sup>のおはします御<sup>ミ</sup>とふらひに御<sup>ミ</sup>つかひあり。此卷<sup>コノマキ</sup>は五十四帖のかんもと心得<sup>コハロウ</sup>へし。

6 うきめかる伊勢<sup>イセ</sup>をの蜚<sup>アマ</sup>をおもへやれもしはたるてふ須磨<sup>スマ</sup>の浦<sup>ウラ</sup>にて

須磨

御伝曰、此花形、狂ひ松也。是を磯馴松と云。前<sup>8</sup>糸芒、時節の花を活、根元、床の左<sup>12</sup>なし、末を床の右<sup>12</sup>ゆくやうにいくるなり。前は則、海辺とみるへし。松の根本、左<sup>11</sup>三行は須磨、右<sup>11</sup>なるは明石なり。いかにも物淋しく生ると心得へし。

愚按<sup>12</sup>曰、左遷の時なれは淋しく活る事、習也。頃は三月廿日也。紫<sup>14</sup>の色の花を遠く活るもよし。須ま趣給ふ折、紫の上に御名残をしみ給へる所也。磯馴松<sup>15</sup>二杜若<sup>16</sup>なとよし。又、何にても、真木のうらより草華<sup>17</sup>さしたるもよし。「柱<sup>18</sup>がくれの面影」といふことあり。又、白花を高く活るもよし。「晝かけていつる月」といふに縁あり。桜<sup>18</sup>若木のさくら、竹<sup>19</sup>たけのかき、松<sup>20</sup>松のはしら、是<sup>21</sup>等は須磨の家居のけしき也。以上、習あり。

【訳】花の宴の頃、(光源氏が)扇を交換されたのは、臘月夜の尚侍(内侍司の長官)である。朱雀帝があれほどご寵愛なされるのに、光源氏が関係を持ちなさんと噂になって、(朱雀帝の)母君はたいそう立腹なさって、(光源氏を)悪いように言い、須磨に左遷されることによって、巻の名となった。そして、賢木の巻で伊勢へ下向なさった六条御息所から、こうして光源氏が(須磨に)いらっしゃるお見舞いに御使者がある。この巻は『源氏物語』五十四帖の肝要と理解しなさい。

伊勢の国で浮き海布(浮いている海藻)を刈る海人のように、憂き目にあっている私(六条御息所)のことを思いやってください。(海人が)藻塩を垂れているように、あなた(光源氏)が涙を流している須磨の浦で。

師伝によると、この花の形は狂い松である。これを磯馴松という。前方に糸薄、季節の花を活け、根元を床の間の左に配置し、枝の先を床の間の右にいくように活けるのである。手前とはつまり、海辺と見るのがよい。松の根元が左

に行くのは須磨、右になるのは明石である。いかにも、もの寂しく活けると理解しなさい。

愚案によると、左遷の時なので寂しく活ける事がしきたりである。時分は三月二十日である。紫色の花を遠くに活けるのもよい。須磨に赴きなざる折、紫の上にお名残を惜しみなさったところである。磯馴松に杜若<sup>かきつばた</sup>などもよい。また何であつても（活け花の）中心の木の裏側から草花を挿すのもよい。「柱に隠れている姿」ということが（物語に）ある。また、白い花を高く活けるのもよい。「明け方にかけて出る月」ということに由来がある。桜は若木の桜、竹は竹の垣根、松は松の柱、これらは須磨の住まいの風景である。以上、伝授がある。

【注】 1 「これはけんしの御あに朱雀院、御くらゐの時、はなのえんにあひそめし、おほろ月よの内侍のかみのこと」『小鏡』。「花のゑんの頃、扇を取かわし給ふ女」〔六帖〕。「花の宴」は8花宴の巻で催された、花見の宴。「朧月夜の尚侍」は右大臣の娘で、弘徽殿太后の妹。花宴の巻で、朧月夜は光源氏と逢瀬を交わし和歌を贈答したが、名前を告げなかつたので、光源氏は扇を交換して別れた。 2 「御門の、さしも時めかせ給ふないしのかみを、けんしをかし給ふと」『小鏡』。朱雀帝がたいそう寵愛なさる朧月夜の尚侍に光源氏が関係を持ったことが右大臣に知られ、噂になった。 3 「うちの御は、大に御腹たち給ひて、あしきさまにいひ、すまへなかし給ふにより、すまとはいふなり」『小鏡』。「たちちめの御不興ありて、須磨の浦へうつされおはしませしゆへ、須磨の巻と申にて候」〔六帖〕。「御母」とは朱雀帝の実母で、朧月夜の姉である弘徽殿太后。弘徽殿は朱雀帝に妹の朧月夜を入内させようと考えていたが、光源氏と関係を持ったことが発覚したため激怒し、光源氏の左遷を画策した。 4 「扱も、さかきの巻に、いせへくたり給ひし宮すところより、かくて、けんしのおはします御とふらひに、御つかひあり」『小鏡』。「みやす所、いせより御音信の和歌、おほくありまいらせ候」〔六帖〕。六条御息所は9葵の巻で生霊<sup>いきりょう</sup>となつて葵の

上を死に追いやり、光源氏の愛を失ったと考え、10 賢木の巻で光源氏と最後の別れを惜しんだ後、三十歳で伊勢に下った。須磨にいる光源氏のもとには、他の女性からも手紙が届く。5 「此まき、五十四帖のかんもと承りまいらせ候」（『六帖』）。「かんもん」（肝文）は重要なこと、肝要の意。この須磨の巻を、『源氏物語』全五十四帖の中で重要な巻と捉えている。6 巻名歌。和歌の第三句が、『小鏡』と『六帖』は「おもひやれ」。六条御息所は自分を伊勢の海人になぞらえ、自分のことを思いやつてほしいと光源氏に詠みかける。「藻塩垂る」とは、海藻に海水をかけることで、和歌では「潮垂る」（涙を流す）を掛ける。海水をかけて塩分を多く含ませてから焼いて水に溶かし、その上澄みを窯で煮詰めて塩をつくる。『源氏物語』須磨の巻の一節、「おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり」（二八七頁）を踏まえる。「田村（文徳天皇）の御時に、事に当りて津の国の須磨といふ所に籠り侍りけるに、宮の内に侍りける人につかはしける。わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ」（古今和歌集・雑下・行平・九六二）が前提になる。7 「此かた、くるい松也」（『六帖』）。「磯馴松」とは海浜に自生し、磯を吹く風に吹かれ続けたために幹や枝が傾いて伸びた松をいう。8 「前に糸すき、時節の花、生る」（『六帖』）。「糸芒」はススキの一変種で、茎・葉・根ともに全体に小ぶりのためこの名がある。9 「松の根もと、床の左へなし、末を床の右へゆくやうに生る也」（『六帖』）。「床」（床の間）に置く松の向きを指示する。10 「前は則、海辺と見るへし」（『六帖』）。活け花の手前を須磨の海辺になぞらえる。11 「松の根もと、左にゆくは須磨、右へなるは明石也。左りは須磨、右は明石と知るへし」（『六帖』）。次の明石の巻にも、「左りは須磨、右は明石と知るべし」（注7）とあり、松の根元の向きは二巻で逆になる。12 「いかにも、ものさひしく生る」（『六帖』）。須磨でわび住まいをする光源氏の様子を表わす。13 「頃は三月廿余日なり」（『小鏡』）。三月二十日頃に光源

氏は都を離れ須磨へ旅立った。 14 「これらは、須磨へおもむき給ふ折なり。むらさきの上に御名残おしみ給ひしお

りのことばなり」(『小鏡』)。「紫の色の花」は都に残された紫の上、「遠く活る」は光源氏と遠く隔たったことを表現する。須磨に旅立つ前に、光源氏は紫の上と和歌を詠みあい別れを惜しむ。 15 「磯馴松」は注7に同じ。「杜若」

はアヤメ科で湿地に生え、五、六月頃に濃紫色の花を二、三個咲かせる。その紫色の花を紫の上に例える。 16 「は

しらかくれの面影」(『小鏡』寄合語)。「真木」は中心となる木、「草花」は花の咲く草のこと。『源氏物語』では光源

氏が紫の上との別離を嘆く場面において、紫の上は「別れても影だに留まるものならば鏡を見ても慰めてまし」と詠み、柱の陰に隠れて座り涙を見せまいとした(一七三頁)。「真木」の裏側から挿す草花を、柱に隠れた紫の上になぞ

らえる。 17 「あかつきかけて出る月」(『小鏡』寄合語)。高い位置に活ける白い花を月に見立てる。光源氏との別

れを惜しむ紫の上が、月の光に映える描写が物語にある(一八五頁)。 18 「わか木のさくら」(『小鏡』寄合語)。須

磨で初めて新春を迎えた際、前の年に植えた若木の桜が咲いたのを見て、光源氏は都のことを思い出す。 19 「たけ

のかき」(『小鏡』寄合語)。須磨での光源氏の住まいは「竹編める垣」に囲まれている。 20 「松のはしら」(『小鏡』

寄合語)。須磨の住居には「松の柱」がある。注19「竹の垣」と共に、白樂天が「香鑪峯下、新たに山居を卜し、草

堂初めて成り、偶々東壁に題す、五首」と題した律詩の第一首、「五架三間ノ新草堂、石墻、桂柱、竹、牆ヲ編ム」

(『白氏文集』卷十六)に由来する。「桂柱」が「松の柱」に変わっているが、平安中期写の酒井宇吉氏蔵『白氏長慶

集』本文には「松柱」とある。「竹編める垣」も「松の柱」も住まいが唐の異国風であり、この漢詩を詠んだとき左

遷されていた白樂天に光源氏をなぞらえている。 21 「これらは、すまのいゑゐのしきなり」(『小鏡』)。

(出口京香)

十三 明石<sup>アカシ</sup>

源氏<sup>ゲンジ</sup>君、須磨浦<sup>スモノウラ</sup>に左遷<sup>サセン</sup>せられ給ひしは、御とし廿六歳の頃也<sup>コト</sup>。あかしの入道<sup>ニウドウ</sup>といふ人、迎奉<sup>ムカヒタマフ</sup>るによりて、須まよりあかしへ浦<sup>ウラ</sup>つたひ給ふによりて、あかしの巻<sup>マキ</sup>とはいへり。さて入道の娘<sup>ムスメ</sup>明石<sup>アカシ</sup>の上<sup>ウヘ</sup>にあひ馴給ひ、岡部<sup>オカベ</sup>の宿江<sup>ヤド</sup>通<sup>トウ</sup>ひ給ひし時<sup>トキ</sup>、馬<sup>ウマ</sup>にのりて行給ふに、ある夜<sup>ヨ</sup>、都なつかしくおほしめし、うたを詠<sup>エイ</sup>し給ひしは、いとくあはれなる巻也<sup>マキ</sup>。秋<sup>アキ</sup>のよの月毛<sup>ツキケ</sup>の駒<sup>コマ</sup>よ我<sup>ワカ</sup>こふる雲井<sup>クモキ</sup>をかけれ時の間<sup>マ</sup>もみん

明石<sup>アカシ</sup>

御伝<sup>ミツタネ</sup>曰<sup>イハス</sup>、馴磯松<sup>ナレマツ</sup>、根本<sup>ネモト</sup>、床<sup>トコ</sup>の左<sup>ヒダリ</sup>、木末<sup>キノスエ</sup>、床<sup>トコ</sup>の右<sup>ミキ</sup>行<sup>ユク</sup>やうに生<sup>イクル</sup>。その裏<sup>ウラ</sup>の方<sup>カタ</sup>時節<sup>トキセツ</sup>の花<sup>ハナ</sup>、糸<sup>イト</sup>す、き、あしらふへし、左<sup>ヒダリ</sup>は須磨<sup>スマ</sup>、右<sup>ミキ</sup>はあかしと知<sup>シル</sup>べし。海辺<sup>カイヘン</sup>、里<sup>サト</sup>の取<sup>トリ</sup>やうは、左右<sup>サユウ</sup>にて、うしろ、前也<sup>マヘ</sup>。是<sup>コレ</sup>にて右前<sup>ミキマヘ</sup>になる也。須磨<sup>スマ</sup>明石<sup>アカシ</sup>は浦<sup>ウラ</sup>の伝也<sup>ツタヘナリ</sup>。時節<sup>トキセツ</sup>の珍花<sup>チンクハ</sup>は入道<sup>ニウドウ</sup>の娘<sup>ムスメ</sup>とみる也。又、杜若<sup>カキツハタ</sup>もよろし。

愚按<sup>コト</sup>曰<sup>イハス</sup>、釣舟<sup>ツリフネ</sup>よし。あかしの入道<sup>ニウドウ</sup>より案内<sup>アンナイ</sup>申て、源氏<sup>ゲンジ</sup>をよびたてまつりて、御迎舟<sup>ミムカイフネ</sup>をたてまつる所<sup>トコロ</sup>としるべし。頃<sup>コト</sup>は三月也。追風<sup>ツイフウ</sup>とあれば、舟<sup>フネ</sup>に馬蘭<sup>バラン</sup>を真帆<sup>マホ</sup>にいくるもよし。又、蔓類<sup>ツルルイ</sup>を活<sup>イク</sup>。是<sup>コレ</sup>を浦<sup>ウラ</sup>つたひの花<sup>ハナ</sup>といふ。松<sup>マツ</sup>を活<sup>イク</sup>。是<sup>コレ</sup>は、「住<sup>スミ</sup>よしの神<sup>カミ</sup>のあはれとや、おもひ給ひけん」と、いふ詞<sup>コトハ</sup>により、又、遠近<sup>エンキン</sup>の花<sup>ハナ</sup>をいくる。「をちこち」と、いふことあり。又、芒<sup>スミ</sup>のはらみ穂<sup>ホ</sup>を活<sup>イク</sup>事<sup>コト</sup>、秘伝也<sup>ヒデン</sup>。あかしの入道<sup>ニウドウ</sup>のむすめ六月<sup>ムツキ</sup>のころより、たゞならずなりたりしを御覧<sup>コラン</sup>しをきて、八月<sup>ヤウグ</sup>に都めしかへされ給ふ也。又、波越<sup>ナミコシ</sup>の松<sup>マツ</sup>といふ活方<sup>イケカタ</sup>あり。芒波<sup>スベキ</sup>トミル也<sup>モト</sup>の下<sup>コマツ</sup>に小松<sup>コマツ</sup>を活<sup>イク</sup>る也。

21 うらなくもおもひけるかな契りしを松よりなみはこえし物ぞと

【訳】 光源氏が須磨の浦に左遷されなさったのは、お年が二十六歳の頃である。明石の入道という人が、(光源氏を)

お迎えして、須磨から明石へ浦伝いされたので、明石の巻と言う。さて、（光源氏は）入道の娘である明石の君と互いに親しまれて、（明石の君の住まいである）岡辺の家に通いなさった時、馬に乗ってお出かけになり、ある夜、都を懐かしくお思ひになり、和歌をお詠みになったのは、とても哀れ深い巻である。

秋の夜の月毛の駒よ、わたしが恋い慕っている雲のかなたを駆けておくれ。ほんの束の間でも（恋しい紫の上を）見よう。

師伝によると、磯馴松の根元を床の間の左に配置し、枝の先を床の間の右に行くように活ける。その裏の方に、季節の花や糸薄をあしらうのがよい。（松の根元が）左になるのは須磨、右になるのは明石と理解しなさい。海辺、人里の捉え方は、左右で、後ろ、前である。このため、右前になるのである。須磨、明石は浦の伝えである。季節の珍しい花は入道の娘と見るのである。また、杜若かきつばたもよろしい。

愚案によると、釣船がよい。明石の入道からお取次ぎして、源氏をお招きして、お迎えの舟をさし上げる所と知りなさい。時期は三月である。（物語に）追風とあるので、舟に馬蘭を、真帆のように活けるのもよい。また、蔓の類を活ける。これを浦伝いの花と言う。松を活ける。これは、「住吉の神が（光源氏を）気の毒に思われたのだらうか」という言葉による。また、遠近そんちんの花を活ける。「をちこち」という言葉がある。また、薄のはらみ穂を活けることは秘伝である。明石の入道の娘が六月の頃から（光源氏の子を）身ごもったのを（光源氏は）見届けられて、（光源氏だけ）八月に都へ呼び戻されなさるのである。また、波越なみこしの松という活け方がある。波に見立てた薄の下に、小松を活けるのである。

（わたしはあなたを）うっかり安心して信じていましたよ。お約束したのですから、松を波が越えないように

浮気はしないと。

【注】 1 「君、廿六才の頃」(『六帖』)。「源氏物語」では左遷の記述はなく、光源氏が謀反の嫌疑で除名処分を受けることを恐れて、そうなる前に自ら須磨に引退したとある。 2 「此巻に源氏、須磨よりあかしのうらへ、うらつたひ給へは、あかしの巻といふへし」(『小鏡』)。「あかしの何かしの入道といふ人、君をむかへ奉るによりて、明石の巻と申候」(『六帖』)。明石入道は播磨国の元国司で、出家して明石の浦に住み、娘(明石の君)を都の貴人と結婚させたいと考えていた。光源氏は夢の中で亡父の桐壺院から、住吉の神の導きに従い須磨を離れるように諭された。入道はかねて夢のお告げで光源氏を迎えよと告げられ、船を用意して光源氏を明石に迎えた。 3 「入道の娘、あかしの上にあひなれ給ひ、岡部の宿へ通ひたまひし時、都なつかしくおほしめして、「秋の夜の月けの駒よ」と、よみ給ひしとぞ。いとあわれに、おもひまいらせ候」(『六帖』)。「さて、とかくいひよりて、かよはせ給ふ。馬にて、かよはせ給ふに、ある夜、都もこひしくおほしめして、げんし、「秋のよのつきげのこまよ(中略)ときのまもみん」と、よみ給ひしなり」(『小鏡』)。 4 卷名歌。「秋の夜の」は、「月毛の駒」の「月」を導く序詞。「月毛」は馬の毛色の名。茸毛でやや赤みを帯びて見えるものを指す。 5 この活け方では、須磨の巻の「松の根本、床の左<sub>ニ</sub>なし、末を床の右<sub>江</sub>ゆくやうにいくるなり」と同じになる。「此かた、曲ひ松、根、床の右へ、木末、床の左へゆくやうに生け」(『六帖』)が正しい。「磯馴松」は12須磨の巻の注7参照。 6 「そのうらの方に時節の花に糸すき、応答すへし」(『六帖』)。当巻では松の裏、須磨の巻では松の前に活ける。「糸芒」は12須磨の巻の注8参照。 7 「左りは須磨、右は明石と知るへし」(『六帖』)。12須磨の巻の注11参照。 8 「海辺、里のとりやう、左右にて、後口、前へなり。これにて右、まへになるなり」(『六帖』)。12須磨の巻に「前は則、海辺とみるへし」(注10)とあるので、海は前方、



人里は後方。当巻の注7によると右は明石を指すので、「右・前」とは明石の海辺を示すか。 9 「須磨、明石は、浦の伝なり」(『六帖』)。須磨と明石の活け方は、浦の伝と総称される。 10 杜若は紫の上にも見立てられた(12須磨の巻の注15)。明石の君の、都の貴人にも負けない気品の高さを表わすか。 11 「釣船」は吊るして使う舟形の花器。『源氏物語』で、入道の用意した迎え船を光源氏が「うれしき釣舟をなむ」(二三三頁)と言ったことにちなむ。 12 「かの人のもとより案内申て、けんしをよひたてまつりて、御むかひに船をたてまつる」(『小鏡』)。 13 「これは三月なり」(『小鏡』)。光源氏が須磨から明石へ移ったのは、三月十三日。 14 『源氏物語』では入道が光源氏を迎えに須磨へ行った時も、明石に戻った時も、不思議な追い風(順風)が吹いたとある(二三二・二三三頁)。「馬蘭」は7紅葉賀の巻の注18参照。真帆は追風を受けて帆走する船が、帆面を船首尾線に対してほぼ直角に張る帆。ちなみに片帆は横風を受けて帆走する時の帆。 15 他の物に巻きついたり、地面を這って伸びたりする蔓を、入道の援助で光源氏が須磨から明石へ浦伝いすることに見立てる。 16 「むこにとりたてまつらんとおもふ心を、すみよしの神のあはれとやおもひ給ひけん」(『小鏡』)。住吉の神は海上安全の神。松は住吉神社の風物。 17 「をちこち」(『小鏡』寄合語)。『源氏物語』では光源氏が「をちこちも知らぬ雲居にながめわびかすめし宿の梢をぞ問ふ」(二四八頁)という和歌を明石の君に送った。「遠近」という花は不明だが、「遠近人」という名のもみじはある。 18 「芒のはらみ穂」とは、穂を包んでいて膨らんでいる薄を妊婦に例える。 19 「扱このむすめ、六月のころより、た、ならすなりたりしを御覧しをきて、八月に都へめしかへされ給ふ」(『小鏡』)。 20 「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」(古今和歌集・東歌・一〇九三)により、波が松を越すとは「あだし心」(浮気心)を意味する。 21 「うらなし」は相手を疑わず、うっかり安心して意。「うら」に「浦」をかけて、「波」の縁語。光源氏からの手紙

で、明石の君のことを知らされた紫の上が詠んだ和歌。

（胡鴻洋）

十四  
霽標

源氏、都にめしかへされ、もとの御位に改り、数より外の権大納言になり、内大臣かけ給ふ。いみしく榮給へり。須磨にて雷落か、りたる御夢のつげ、住吉の神の御誓也と秋の頃、詣給ふ。其折から、明石の上も住吉詣給ひて、はからず行あひ給ひしに、松原のあたりに御車をたてつ、けて、いみしきさまなれば、難波に船さしとめ、やすらひ、とはせ給ふ。其時の歌に、

数ならて難波のこともかひなきになに身をつくしおもひそめけん

霽標

御伝曰、若松式本、時節の花、赤白二色、生活へし。水草にてもよしとす。さて、水草は霽標に縁あり。歌には「身をつくし」といふよみかけ、又、出水の丈尺を知る杭を霽標と云也。

愚按曰、源氏、都めしかへされて、程なくもとの御位に改り、又、権大納言になり、内大臣かけ給ふ。いみじく榮給ふ。祝義の花也。芒を活躍。一本、をれ枝を用。是は落雷の躰也。又、松に小車を活躍もよし。「松原あたりに御車たてつ、けて」とあり。又、舟もよし。「難波の方に舟さしとめ」とあり。但、舟二艘也。「めぐりあふ」「難波の舟」などあり。又、竹の親と子をいくるもよし。三月十六日、あかしのうへは姫君うみ奉りたり。産屋七日の祝等も祝義の花に用ふへし。

十四 滯標。若松、時の紅白二種の花、水草。

【訳】光源氏は、(朱雀帝の勅命により) 都に召し返され、以前の官位に戻られ、(さらに昇進して) 定員外の権大納言になり、内大臣を兼任なされる。たいそう榮えなされた。須磨で雷が落ちたときの(光源氏が見た) 夢のお告げは、住吉の神の御誓約であるとして、(光源氏は) 秋の頃、住吉神社(現在の住吉大社) に参詣なさる。ちょうどその時、明石の君も住吉神社に参詣なさり、(光源氏に) 思いがけなく出くわされたが、(光源氏の一行が) 松原のあたりに御車を並べて、立派な様子なので、(明石の君は取つて返して) 難波に船を泊め、(光源氏に和歌を送るかどうか) ためらつて、(手紙を) 送られる。その時の和歌に、

人数にも入らない身の上で、何の生きる甲斐もないこの私なのに、どうして身を尽くして(あなたを) 思い始めてしまったのでしょうか。

師伝によると、若松を二本と、季節の花を赤と白の二本、活けるのがよい。(赤と白の花が無い場合は) 水草を用いてもよいとする。ところで、水草は滯標に縁がある。和歌には(滯標に掛けて)「身を尽くし」を詠みこみ、また、水脈や水深を知らせる杭を滯標というのである。

愚案によると、光源氏は、(朱雀帝の勅命により) 都に召し返され、程なくして以前の官位に戻られ、また(さらに昇進して) 権大納言になり、内大臣を兼任なさる。たいそう繁榮される。祝儀の際に用いる花である。薄を活ける。(そのうちの) 一本は、枝が折れたのを用いる。これは、落雷の体裁である。また、松に小車を活けるのもよい。「松原あたりに御車を立て続けて」と(物語に) ある。また、舟もよい。「難波の方に船を泊め」と(物語に) ある。ただし、舟は二艘である。「巡り会う」「難波の舟」など(物語に) ある。また、竹の親と子(筍)を活ける

のもよい。三月十六日、明石の君は姫君をお産みした。出産七日目の祝い等においても、祝儀の花を用いるのがよい。

【注】 1 「けんし都へめしかへされて、程なく、もとの御くらゐにあらたまり、かすより外の権大納言になり、内大臣かけ給ふ」(『小鏡』)。須磨に身を退いていた光源氏は、朱雀帝の退位に伴い、都に召し返された。権大納言(定員外の大納言)になったのは明石の巻、内大臣(左右大臣を補佐する大臣)を兼任したのは滯標の巻である。 2 「いみしくさかへ給ふ程に」(『小鏡』)。 3 「すまにて、かみなりおちか、りたる夜の御ゆめのさとしも」(『小鏡』)。『源氏物語』には、須磨を暴風雨が連日襲いかかり、落雷のあと、まどろむ光源氏の夢枕に亡父(桐壺院)が立ち、「住吉の神の導きに従い、この浦を去れ」と告げたとある。 4 「すみよしの神の御ちかひとおほして、秋のころ、すみ吉へ参り給ふ折ふし」(『小鏡』)。「君、都へかへり給ひしは住吉の御誓ひとよろこひ、もふて給ひし折から」(『龍野』)。『源氏物語』には光源氏が、都に無事戻れたことと明石の姫君の誕生のお礼参りとして、住吉神社に参詣したとある。 5 「かのあかしの御かたも、はる秋ことに、おさなくより御おや、いたし立て、すみよしへ参らするに」(『小鏡』)。『源氏物語』には、明石の君は毎年恒例の行事として住吉神社に参詣しているが、去年と今年は懷妊・出産のため参詣を怠り、そのお詫びもかねて思い立ったとある。 6 「しらすして、あかしよりもまいりたれば」(『小鏡』)。「明石の上に行きあひ給ひし事を」(『龍野』)。明石の君も光源氏も、同日に住吉神社に参詣することを知らなかった。 7 「松原のあたりに、御車たてつゝけて、いみしきさまなれば」(『小鏡』)。「松原」は住吉神社付近の松林。『源氏物語』には、数多くの官人たちが参加した描写はあるが、光源氏以外の車については言及されていない。 8 「なにはに御舟さしとめ、やすらひ、とはせ給へは」(『小鏡』)。「難波」(大阪湾の一部)は祓の名所。『源

氏物語』では明石の君はいつも船で住吉神社に参詣するが、浜辺は光源氏の一行であふれていたので、予定を変更して難波に停泊したとある。 9 卷名歌。明石の君が、身分違いの恋だと自覚しながらも、光源氏を恋い慕い始めてしまったことを嘆く和歌。「難波」と「何は」、「身を尽くし」と「濡標」が掛詞。物語では光源氏から届いた和歌への

返歌。 10 「若松二本に時節の花、赤白二色、生へし。(中略) 此二色ノ花ハ、光君ト明石ノ上、御二方ノ心也」

〔龍野〕とあるように、赤い花と白い花は光源氏と明石の君を表わす。 11 「若<sup>も</sup>、なき時は、水草二種そへ、生へ

し」〔龍野〕 12 水草は水中または水辺に生えるため、水路を示す目印になる濡標と縁がある。 13 濡標は、和歌で

は「身を尽くし」の掛詞として用いられることが多い。明石の君が住吉に参詣しに来たことを知った光源氏は、「今はた同じ難波なる」と口ずさんだ。その古歌は、「わびぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ」

(後撰和歌集・恋五・九六〇・元良親王)。 14 注1を参照。 15 注2を参照。 16 「祝義」は祝儀と同義で、祝いの

儀式。 17 折れた薄を一本用いて落雷を表現するが、『源氏物語』で雷が落ちたのは、13明石の巻である。 18 「小

車」はキク科で、その名は花を小さな車(の車輪)に見立てたことによる。松に小車は、松原のあたりに数多くの車が立ち並んでいることを表現する。 19 「難波の方に舟さしとめ」は注8参照。舟を二艘用いるのは、光源氏と明石

の君の舟を指すか。「すみよし。めぐりあふ。なにはの舟」〔小鏡 寄合語〕。 20 「竹の親と子」は十分に生長した

竹と筍を指し、明石の姫君とその親を表わす。 21 「あかしのうへは姫君、三月十六日にうみたてまつり給へは」

〔小鏡〕。三月十六日、明石の君は女兒(明石の姫君)を出産する。 22 「産屋<sup>うぶや</sup>」は「産養<sup>うぶやしな</sup>ひ」に同じで、子が生

まれて三・五・七・九日目の夜に催す祝宴。

(武蔵隼斗)

『源氏流極秘奥儀抄』注釈(二) 12須磨―17絵合

十五 蓬生<sup>ヨモキフ</sup>

源氏御とし廿八歳の四月、花<sup>ハナ</sup>ちる里<sup>ユキ</sup>行給ふ。折節<sup>オリシモ</sup>、末<sup>スヘ</sup>つむ花<sup>ハナ</sup>のこと、思ひやりて尋給ふ。庭<sup>ニハ</sup>によもぎしげり露<sup>ツユ</sup>しげ、れば、馬<sup>ウマ</sup>の鞭<sup>ムチ</sup>にて露打<sup>ツユ</sup>はらひ、それよりあはれみたまふ。庭<sup>ニハ</sup>の草<sup>クサ</sup>をもひきのけさせ、ところ／＼つくろはせなどして、二三年ありて二条院<sup>ニニヤウ イニンカン</sup>東<sup>タイ</sup>の対<sup>タイ</sup>にうつして、ふちし奉り給ひしなり。

尋<sup>タツネ</sup>ても我<sup>ワレ</sup>こそとはめ道もなくふかきよもきかとの心を

蓬生<sup>ヨモキフ</sup>

御伝<sup>コテシ</sup>曰<sup>イハク</sup>、此形<sup>コノカタ</sup>、蓬<sup>ヨモキ</sup>をみ木として、時節<sup>シセツ</sup>の珍花<sup>チンカハ</sup>を間<sup>アイタ</sup>へさすべし。又、糸薄<sup>イトススキ</sup>か山萱<sup>ヤマスゲ</sup>、山かやにても、さし交<sup>マシヘ</sup>てよし。頃<sup>トキ</sup>は五月也。

愚按<sup>アカハナ</sup>曰<sup>イハク</sup>、赤花<sup>アカハナ</sup>をさし、蓬<sup>ヨモキ</sup>をとめになすもよし。是<sup>コノ</sup>は花<sup>ハナ</sup>ちる里<sup>サト</sup>の方<sup>カタ</sup>へ五月ばかりのころ、わたり給<sup>タマ</sup>ふに、さみだれの露<sup>ツユ</sup>ふかく、よもぎ律<sup>ムクラ</sup>しげりふるき家<sup>イヘ</sup>あり。「馬<sup>ウマ</sup>のむちにて露打<sup>ツユ</sup>はらひて入<sup>イリ</sup>たまふ」とあり。又、蓮<sup>レン</sup>の葉<sup>ハ</sup>を笠<sup>カサ</sup>と准<sup>ナゾ</sup>ふもよし。又、すゝきを生<sup>イク</sup>るもよし。「狐<sup>キツネ</sup>のすみか」と云<sup>イフ</sup>詞<sup>コトハ</sup>により。又、たけ高<sup>タカ</sup>きふと葦<sup>イ</sup>など生<sup>イク</sup>るもよし。かつらうつくしく九尺斗<sup>クシヤクハカリ</sup>なん有けるを、御かたみにとて侍従<sup>シシウ</sup>にたひしなり。此事<sup>コノコト</sup>を故事<sup>コシ</sup>とす。

十五 蓬生 夕顔の君。蓬、時節ノ花、糸芒、山萱、山萱、蓮ノ葉。

【訳】光源氏が御歳二十八歳の四月に、花散里のもとへお出かけになる。その折、末摘花のことを案じて(末摘花の屋敷を)訪問される。庭に蓬が茂り露が多いので、馬の鞭を使って露を打ち払い、それ以後(末摘花の)面倒を見られる。(光源氏は)庭の草も取り除けさせ、あちこち修繕させたりなどして二、三年の後、(末摘花を)二条院の東の対に移らせて、援助なされたのである。

探り訪ねても私の方から（末摘花を）訪れよう。道も見えないほど蓬が生い茂っている、その根元ではないが、元のままの（末摘花の）心を。

師伝によると、この形は蓬を中心として、季節の珍しい花を間に挿すのがよい。また、糸薄か山萱、山萱でも挿して混じらせてもよい。頃は五月である。

愚案によると、赤花（末摘花）を挿し、蓬を根締めにするのもよい。これは（光源氏が）花散里の方へ五月ごろお出かけになる時に、五月雨の露が深く、蓬や葎が生い茂った古い家がある。「馬の鞭で露を打ち払ってお入りになる」と（物語に）ある。また、蓮の葉を笠になぞらえるのもよい。また、薄を活けるのもよい。「狐の住みか」という言葉による。また、丈が高い太藺などを活けるのもよい。鬢（抜け落ちた髪）が美しく九尺ほどあったのを、形見の御品として（末摘花が）侍従にお与えになったのである。このことを故事とする。

【注】 1 「源氏、廿八歳の四月に、須磨より御のほり有て、花散里へ行給ふ折ふし、末摘はなの事、おもひやりて、尋ね給ふ」（『龍野』）。「すまよりかへり給ひて、花ちるさとの御かたへ、五月はかりのころ、わたり給ふに」（『小鏡』）。『源氏物語』では光源氏が秋に明石から帰京して、翌年の四月に花散里のもとへ行く途中、たまたま末摘花の屋敷の前を通りかかったとある。『龍野』と注1の本文は四月、『小鏡』と注1013の本文は五月とする。 2 「庭に蓬しげりて」（『龍野』）。「よもきむくらしけり」（『小鏡』）。「蓬」はキク科の多年草、「葎」は蔓草の総称。光源氏が訪れたとき、末摘花は没落して庭には蓬や葎が生い茂っていた。和歌の世界では、蓬も葎も荒れ果てた家に生える草である。 3 「露ふかく見へければ」（『龍野』）。「さみたれの露ふかく」（『小鏡』）。『源氏物語』では何日か雨が降り続いていた、と書かれている。 4 「打はらわせて入り給ふより」（『龍野』）。「御ともの人のむまのむちにて、露打は

らひて入たまふ」（『小鏡』）。光源氏の家来が馬の鞭を振って草葉に宿る露を払い、後から来る光源氏が濡れないようにした。 5 「それより、あわれみ給ふ」（『小鏡』）。当時は通い婚で、花嫁の実家が花婿の面倒を見るのが通例なので、光源氏が女君の世話するのは異例のこと。 6 「にはの草をもひきのけ、ところ／＼つくろはせなとして、二年ありて、二条のゐん、ひかしのたいにうつして、ふちしたてまつり給ひしなり」（『小鏡』）。末摘花は光源氏と再会して二、三年後に、光源氏が建てた別邸（二条東院）に移った。 7 卷名歌。蓬が生い茂り道も見えない、と従者に告げられた際、訪問を阻むように生い茂る草にもめげず、心変わりしていない末摘花に会いに行こうと、光源氏が決心した独詠歌。「蓬がもとの心」に「蓬が下」と「元の心」を重ねる。 8 「此かた、蓬を身木にして、時節の珍花を問へさしましへて」（『龍野』）。「蓬」は注2参照。「珍花」は珍しい花の意だが、具体的に何を指すのかは不明。蓬が生い茂る屋敷に住む末摘花を、蓬の間に活ける珍花に例える。 9 「糸薄か山かやにても、さしましへて生へし」（『龍野』）。「糸薄」はススキの一変種で、茎・葉・根ともに全体に小ぶりのためこの名がある。「山萱」は山に生えている菅の類。「山萱」は山に自生するススキ、オギ、チガヤなど、主として屋根を葺く材料に用いられるイネ科の植物の総称。いずれも粗末な屋根を葺くので、末摘花の廃屋になぞらえる。 10 「五月はかりのころ」（『小鏡』）。注1参照。 11 「赤花」はアカバナ科の多年草で夏に紫紅色の花が咲き、ここでは末摘花の赤い鼻に見立てる。一方「末摘花」という植物は「紅花」の異名で、「赤花」とは異なる。 12 「とめ」とは根締め、すなわち活け花において挿した花や枝などの根元を締め、形を整える花材を指す。 13 「花ちるさとの御かたへ、五月はかりのころ、わたり給ふに、さみたれの露ふかく、よもきむくらしけり、ふるさ家あり」（『小鏡』）。注123参照。 14 「むま。むち」（『小鏡』寄合語）。注4参照。 15 木々の葉に置く露が雨滴のように降りかかるため、家来が光源氏に「御傘さぶら



ふ」(お傘がございます)と言った。蓮の葉を傘になぞらえるのは、『鳥獸戯画』などにも見られる。16「すすき」は注9参照。17「きつねのすみか」(『小鏡』寄合語)。物語にも、末摘花のあばら屋は「狐の住みか」(三二七頁)になったとある。薄は穂の形が動物の尾に似ていることから、別名「尾花」という。ここでは狐の尾を薄に例える。18「ふと葦」はその名の通り、茎が円柱形で太く、茎で花筵などを編む。19「かつらをして持給へる。いとうつくしくて、九尺はかりなん有けるを、御かたみにとて、侍従にたひしなり」(『小鏡』)。末摘花の唯一の相談相手であった乳母子の侍従が京を去る時、形見として与える着慣れた衣は垢じみているので、末摘花は自分の髪の手を取り集めて作った鬘を与えた。この九尺(約二七〇センチ)もあり美しい鬘を、丈の高い太藺に例える。

(出口京香)

## 十六 関屋

関<sup>トキ</sup>の巻<sup>マキ</sup>は源氏君<sup>ケンシノキミ</sup>、石山<sup>イシヤマ</sup>に詣<sup>マウテ</sup>給ひし時<sup>トキ</sup>、せき山<sup>ムカシノセミ</sup>にて昔<sup>イヨノスケ</sup>空蟬<sup>ヒタチ</sup>と聞えしをとこの伊予介<sup>コクシ</sup>、常陸<sup>ヒタチ</sup>の国司<sup>コクシ</sup>になりて、下<sup>クダ</sup>りしが、かはりて後<sup>ノチ</sup>、京<sup>キヤウ</sup>へのぼるに、せき山<sup>セキ</sup>にて逢<sup>アヒ</sup>給ひしか、御<sup>ミ</sup>こ、ろしりの小君<sup>コミコ</sup>に御文<sup>ミコト</sup>あり。空<sup>ナカ</sup>せみの歌<sup>ウタ</sup>、逢<sup>アサカ</sup>坂<sup>セキ</sup>の関<sup>セキ</sup>やいかなる関<sup>セキ</sup>なればしげきなげきの中<sup>ナカ</sup>をわくらん<sup>ワクラン</sup><sup>4</sup>  
わくらにはゆきあふ道<sup>ミチ</sup>を頼<sup>タノミ</sup>しも猶<sup>ナラ</sup>かひなしや塩<sup>シホ</sup>ならぬ海<sup>ウミ</sup><sup>4</sup>  
ゆくくとせきとめかたき涙<sup>ナミダ</sup>をや絶<sup>タヘ</sup>ぬ清水<sup>シミツ</sup>と人<sup>ヒト</sup>やみるらん<sup>5</sup>

## 関屋

御伝<sup>コデン</sup>曰<sup>イワク</sup>、此<sup>コノ</sup>形<sup>カタ</sup>、真<sup>ミ</sup>き、同<sup>オナ</sup>し花<sup>ハナ</sup>、其<sup>ナカ</sup>の中<sup>ナカ</sup>を外<sup>ホカ</sup>の花<sup>ハナ</sup>、又<sup>マタ</sup>、しやがにても、さしきる也<sup>ナラ</sup>。是<sup>コレ</sup>、外<sup>ホカ</sup>の花<sup>ハナ</sup>にては嫌<sup>キラ</sup>ふ事<sup>コト</sup>也<sup>ナラ</sup>。

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（二） 12須磨―17絵合

此形<sup>8</sup>は却て、それを用<sup>モテ</sup>る也。是<sup>9</sup>、関屋<sup>セキヤ</sup>の意也。人目<sup>ヒトメ</sup>忍<sup>ニシ</sup>ひ給<sup>タマ</sup>ひし心也。祝義<sup>シウギ</sup>ならず。

愚按<sup>クアン</sup>ニ曰<sup>イハク</sup>、いとく珍らしき花<sup>ハナ</sup>を行会<sup>ユキアイ</sup>に生る事、習<sup>ナラ</sup>ひあり。又<sup>13</sup>、「わくらわに」といふ歌は、たま〜めつらしく行<sup>ユキ</sup>会心<sup>アイシン</sup>なり。清水<sup>スミヅ</sup>によせて水草<sup>スイサウ</sup>を活<sup>イク</sup>るもよし。

十六 関久□ 伊予之介。時ノ花 鳶尾。

【訳】関屋の巻は光源氏が石山寺に詣でられた時、関山（逢坂の関）で昔、空蟬と知られた（女の）夫である伊予介が常陸の国司になって、（任国へ）下っていたが、（次の国司と）交替して後、京へ上る時、関山で（光源氏が）お逢いになったが、（光源氏との）事情を知る小君に（空蟬への）お手紙がある。空蟬の和歌は、

逢うという名の逢坂<sup>あふさか</sup>の関とは、いったいどういいう関所ゆえに、生い茂る木々の間をかき分けて、こうも深い嘆きを重ねるのでしょうか。

たまたま行き逢った所が近江路<sup>あふみち</sup>だと、その名から頼もしく存じましたのに、（お目にかかれぬとは）やはりかいのないことでした。（琵琶湖は）貝の住む塩の海ではなかったのですから。

行きも帰りも、せき止めかねる私の涙を、絶えず湧き出る関の清水と光源氏のご覧になるでしょうか。

師伝によると、この形は中心と同じ花との中を他の花、または射干<sup>しゃが</sup>でも遮るのである。これは他の活け方では、してはいけないことである。この（関屋の）形は却って、それを用いるのである。これは関所の意味である。（光源氏が）人目を忍ばれた趣である。祝儀（祝いの儀式）ではない。

愚案によると、非常に珍しい花を出会うように活けることは、習わしがある。また、「わくらばに」という歌は、たまたま珍しく出会う意味である。清水に事寄せて水草を活けるのもよい。

【注】 1 「けんし石山へ参り給ふに、せき山にて、むかし、うつせみと聞えし人のおとこのいよの介、ひたちの国司になりて、下りしか、かはりて後、京へのほるに、せき山にて、あひ給ひしかは」(『小鏡』)。空蟬は伊予介の後妻で、2 帚木の巻で光源氏と出会った。夫が常陸(現在の茨城県)の国司になると、一緒に下向して、任期が終わり帰京したとき、石山寺に参る光源氏の一行と偶然、すれ違った。 2 「むかしの御心しりのこきみをめして、御文あり」(『小鏡』)。小君は空蟬の実弟で、3 空蟬の巻で光源氏に頼まれ、空蟬との仲を取り持った。光源氏が須磨に退居した時、世間の思惑を憚り父親の任国(常陸)に下った。 3 空蟬が詠んだ卷名歌で、注4「わくらばに」への返歌。「逢坂の関」に「逢ふ」を、「嘆き」に「木」を響かせる。茂る木々に、繰り返される悲嘆の重苦しさを託す。逢坂の関は、滋賀県大津市の逢坂山に置かれた関所。和歌で逢坂の関を越えるとは、男女が契りを交わす意。 4 光源氏が空蟬に送った和歌。「逢ふ道」に「近江路」(あふみち)、「甲斐なし」(かひ)に「貝なし」を掛ける。「塩ならぬ海」は淡水湖で、近江にある琵琶湖を指す。 5 空蟬の独詠歌。「せき」に「関」と「堰き」を掛ける。逢坂の関にある清水は有名で、「逢坂の関の清水にかけ見えて今や引くらむ望月の駒」(拾遺和歌集・秋・紀貫之・一七〇)という名歌がある。 6 「此形、身木、同じ花、その中をは、外の花か、又はしやかにて、さし切ル也」(『龍野』)。中心にする花と、それと「同じ花」を活けて、両者の間に別の花を割り込ませる、という意味か。射干の別名は檜扇で、それは葉が檜扇を広げたように見えることに由来する。その葉で遮るか。 7 「是、外の花形には嫌ふ事也」(『龍野』)。「是」は注6の「さしきる」を指す。 8 「それ」も注6の「さしきる」を指す。 9 「是」が示す「さしきる」は道を閉ざすの意味で、関所に例える。 10 「人目忍ひの歌なと送り給ひしなれば」(『龍野』)。光源氏と空蟬との仲は、手紙を運ぶ小君以外には知られてはならない秘め事である。 11 「無祝儀なり」(『龍野』)。 12 「珍しき」「行会」とは、光源氏

と空蟬との偶然の再会を表わす。 13 光源氏と空蟬が和歌を贈答するのは、十二年ぶりのことである。 14 「水草」

は淡水中、あるいはその辺に生える草。「清水」は注5を参照。

（胡鴻洋）

十七 絵合

弥生のころ、御門冷泉院に絵合ありし時、源氏の君、昔須磨におはしまし、時、たとへなき御徒然のあまりに、色々のかみに、浦のけしき、山のたゝまゐを、御心のゆくゝかきすまし給ふを、紫の上にだにも、みせ奉らす、此時けうに出されたり。紫の上、「おそくもみせ給ひし物かな」と、うらみ給ひしことあり。源氏の御方ひだり、かち給ふによりて、絵合といふ。

6 うきめみしそのをりよりもけふは又過にしかたにかへる涙か

絵合

御伝二曰、二重切にて生る也。木ならは上下木、草花ならは上下草花と心得へし。上下花は違へとも、同じやう生へし。絵合は、もやうを合いくる也。又、花入二つにもする也。頃は三月十日頃と心得へし。

愚按二曰、弘喜殿と梅壺と絵合あり。二瓶にして一瓶は紅梅梅壺と云にかたとる、一瓶白椿こうきてん。さて、源氏のさま

く写し給ひし絵はすぐれ給ひて、勝給へり。又、若紫の上、三のうらみといふことあり。三瓶のうち、藤又杜若もよしを活る習あり。

十七 絵合 伊予之介女房。草花二種（紅梅、白椿、藤）。

【訳】三月の頃、冷泉帝のもとで絵合があった時、光源氏は昔、須磨にいらつしやった時、例えばもない御手持てもちぶさた無沙汰のあまりに、様々な色の紙に、入江の様子や山のたたずまいを、御心のゆくまま立派に描かれた絵を、紫の上にさえもお見せせず、この時の座興にお出しになった。紫の上は、「(光源氏が絵を) 遅く見せなさったものよ」と、お恨みになったことがある。(右方に対して) 光源氏の左方が勝たれたのにちなみ、(この巻を) 絵合と言う。

(須磨で) 辛い思いをしたあの時よりも今日はまた、過ぎ去った日々を思い出して涙が流れることよ。

師伝によると、二重切を用いて活けるのである。木であれば上下ともに木を、草花であれば上下ともに草花を活けると心得るがよい。上下で花が違っても、同じように活けるのがよい。絵合は、趣を合わせて活けるのである。また、花入れを二つにすることもある。頃は三月十日頃と心得るがよい。

愚案によると、弘徽殿と梅壺との間で絵合がある。二つの花入れにおいて、一つは梅壺にかたどって紅梅を活性、もう一つには弘徽殿をかたどって白椿を活ける。さて、光源氏がさまざまに描かれた絵は優れていらつしやって、(絵合の勝負に) お勝ちになった。また、紫の上には、(光源氏に対する) 三つの恨みということがある。三つの花入れのうち、藤、もしくは杜若かきつばたを活けるしきたりがある。

【注】 1 「ころは三月十日ころなれは、大かたのそらも、おもしろき頃、こうきてんと梅つほと、さうをわかち、御ゑあはせありて、みかと御覧あり」(『小鏡』)。「弥生の頃、御門に絵合ありし時」(『龍野』)。「絵合」は物合わせの一種。左右の二組に分かれ、互いに持ち寄った絵を出し合い、その優劣を競う遊戯。勝負の判定は判者が下す。 2 「すまにおはしましし時、たとへなき御つれくゝのあまりに、色々のかみに、うらのけしき、山のたたすまゐを、御心のゆくゝかきすまし給ふ」(『小鏡』)。「光る君、須磨にて書給ひし絵をとり出し」(『龍野』)。「源氏物語」には、

「人々の語りきこえし海山のありさまを、（光源氏は）はるかに思しやりしを、御目に近くては、げに及ばぬ磯のたたずまひ、二なく書き集めたまへり」（須磨の巻、二〇〇頁）とある。 3 「むらさきの上になにも、みせたてまつらす。此とき、けう（興）に出されたり」（『小鏡』）。光源氏は須磨で描いた絵を、紫の上にも見せず秘蔵していた。 4 「おそくも見せ給ひしと、うらみ給ひし歌など、おはしまし候」（『龍野』）。光源氏が絵を今まで見せなかったことへの恨み言として、紫の上は、「ひとりゐて嘆きしよりは海人あまのすむかたをかくてぞ見るべかりける」と詠んだ。「画かた」（絵のこと）と「渴かた」が掛詞。「見る」に「海松みそ」を響かせ、「海人」「渴」「海松」を縁語とする。 5 「これにより、ひたり、かち給ふ。さて、ゑあはせといふ」（『小鏡』）。いずれも劣らぬ名品揃いで絵合の勝負の判定は難航を極めたが、最後に出品された光源氏の須磨の日記絵一卷が梅壺女御を圧倒的勝利へと導いた。 6 卷名歌。注4に引く和歌への返歌。「憂うれき目」と「浮うき海布うへ」（浮いている海藻、「方かた」と「渴」が掛詞。「涙」に「波」を響かせ、紫の上の歌（注4）同様、海辺に関する縁語でまとめた。 7 「二重切に生ル時は、上下同じ形に生へし」（『龍野』）。「二重切」とは、竹の花入の一種。二つの節間に各々窓を開け、水溜も二か所つけたもの。 8 「木花ならば両方木花、草花ならば同じ草花を生へし」（『龍野』）。 9 異なる花を用いる場合も、上下で同じような形に活けるのは、絵合で左右からそれぞれ絵を出すさまを表わす。 10 「絵合は、もやう（模様）をあわする也」（『龍野』）。二組が絵を出し合う絵合になぞらえて、上下で形を合わせる。 11 二重切の代わりに、花器を二つ用いることもある。 12 注1を参照。 13 「絵合」は注1を参照。光源氏が養女にした梅壺女御は、既に入内していた弘徽殿女御と帝寵を二分した。入内当初は弘徽殿女御に寵愛が傾いていたが、絵画を好む冷泉帝は、絵に堪能な梅壺女御に次第に引きつけられていった。これに焦慮した権中納言は、帝の関心をわが娘弘徽殿女御に引き戻そうと、当代有数の絵師たちを集め、贅を尽くして

絵画を製作させた。絵合は、そのような政治背景のもとで行われた。

14 「紅梅」は梅壺女御に見立てる。 15 「白

椿」は白花をつける椿の総称で、注14の紅梅と対応する。赤と白の対比は14霽標の巻の注10にも見られる。

16 最後

に出品された光源氏の絵について『源氏物語』には、「かかるいみじきもの上手（光源氏）の、心の限り思ひ澄まして静かに描きたまへるは、たとふべき方なし。親王よりはじめてたてまつりて、涙とどめたまはず」（三八七頁）とある。 17 「それは、むらさきの上の三のうらみといふ事の一に、此ことたりなりと心えへし」（『小鏡』）。紫の上の

三つの恨みのうち、ほかの二つについて『小鏡』には、「<sup>（一）には</sup>は、あかしの上のかたへの文の上つ、みを見せ給はぬ事。

一には、きぬくはりに、あかしの上には、しろき、ぬを参らせられし事。以上三也」とある。前者は光源氏が明石の君からの手紙を繰り返し見て溜息をついていることに、紫の上が不満を漏らした箇所。『小鏡』には、明石の君への手紙の上包みを光源氏が紫の上に見せなかったとあるが、『源氏物語』には、この手紙は明石の君から光源氏に届いたものであり、光源氏は紫の上の上包みだけを見せたとある（14霽標の巻、二九六頁）。後者は正月用の装束を女君たちに贈る衣配りにおいて、光源氏が明石の君に選んだ白い小桂が美しかったことに紫の上が嫉妬したことを指す（22玉鬘の巻、一三六頁）。 18 花入れを三つ用いるのは、紫の上の三つの恨みになぞらえてか。『藤』は四く五月、淡紫色の蝶形花が長く垂れ下がる房となって咲く。「杜若」は五く六月頃、濃紫色の花を開く。いずれも花の色が紫で、紫の上になぞらえる。

（武蔵隼斗）

